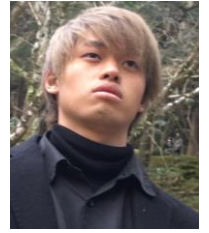


都市公共空間の仮設的な利用形態に関する研究

ー タイ・チェンマイの屋台を事例として ー

Keywords

仮設空間 屋台 インフォーマル
東南アジア 公共空間



AK16046 計良 海人

1. 研究背景

アジア、特に本研究の対象とするタイ王国チェンマイ県では、屋外の公共空間における飲食行為を行う場、いわゆる“屋台”が人々の日常生活の一部となっている。またこの地域における屋台文化は、人々の食生活だけでなく、経済活動、観光資源としても大きな役割を担っており、人々の生活の根幹であるといえる。

街には至る所に屋台で賑わう通りが存在しているが、その賑わいは昼夜で大きく様変わりを見せる。昼の間、普通の通りとして利用されていたものが、夜になるにつれ、屋台が続々と姿を見せ始め、賑わう人々と共に通りを埋めていく。屋台が都市の機能の一部として、毎日稼働し続けているのである。

日本においても、縁日や祭の屋台、商店街の露店があり、最近では都内で移動販売車も多く見かける。屋台は都市の公共空間における活用方法として、仮設的な商業行為の可能性は非常に大きいものと考えられる。しかし、公衆衛生や土地利用の点から、移動販売車や屋台の規制は厳しく、限定的に許可されたものであることが多いのが現状である。

1.1 研究目的

タイでもそういった近代法的な規制は存在するが、一方で地域内の人々の共通認識として容認される行為や法的に違法であっても道義的には許容される行為なども同時に存在する。都市の公共空間において重要な役割を担っているが、その反面、インフォーマルな性質も持つ屋台文化には、度々こうしたグレーゾーン的な暗黙のルールが存在していることが示唆される。例えば、土地の使用に関して、本来なら公的な機関に認められるべきものが周囲の合意によって許容されたり、境界が仕切られていても角地においては自由度が高くなったりと、外部からはわからないが、内部の人々では共有されているルールが存在する。

本研究ではそうした、内部のみで共有されるルールが存在していると仮定した上で、それを明らかにすることを目的に、屋台の平面・配置図、または設営に関するシステム、利用形態、屋台の仮設的な側面、人々の中で育まれた屋台という文化の重要性などといった観点から考察していく。

1.2 既往研究

本研究に関わる既往研究として、タイ・バンコクの屋台の設置状況から街路空間の利用形態を研究したもの、屋台空間の賑わいに関する研究、また、アジア4都市における屋台空間の様態とそこに自生する秩序との関係性に関する研究がある。特に最後の屋台の様態と自生する秩序との関係性を研究したものは、大きく関わっているといえるが、本研究では、屋台の仮設的な側面への考慮、また屋台間の領域性に関して、屋台の要素でも机や椅子といったより細かな物に着目している点で異なるといえる。

1.3 研究方法

1.3.1 実測調査

本研究の資料は2019年8月6日から8月30日までの現地調査によるものである。

本研究ではチェンマイの公共的な都市空間における屋台・露店をはじめとする仮設的な商業行為の実態、また食生活や就労活動といった現地の人々による屋台との関係性、近代法的な観点から逸脱した行為や内部の人間によってのみ許容される行為等を、屋台の使われ方、配置、時間による場所や形態の変化などから分類し分析を行う。また屋台におけるモノ、ファサードと周辺の既存建物との関係性の調査により、屋台の存在する範囲または空間的な位置づけを分析していく。実測調査の内容は以下の通りである。

A. 平面・配置図の作成

実測により、通り・広場における屋台の配置を記録する。また、配置の手順、時間帯による移動、配置に関する既存建物の関係性も併せて考察する。

B. 屋台に使用されるモノの分析

屋台内部において使用される調理器具、移動・組み立て・解体に必要な道具、私的なモノなど、様々なモノを分類し分析を行う。

1.3.2 インタビュー調査

以下の項目に関して、屋台主にインタビューを行った。

- ・名前/年齢/性別
- ・営業年数
- ・定休日
- ・営業時間
- ・営業許可
- ・自身の店舗の領域

2. 調査地概要（チェンマイ県の概要）

本研究の調査対象地とするチェンマイ県はバンコクの北方約720キロに位置し、タイ第2の都市である。1296年にランナー王朝初代メンラーイ王により新しい首都としてピン川のほとりに建設され、以来、この地域の中心として、モン族やタイヤイ族、ビルマ族などさまざまな民族が交流するなか、建築や仏像の様式、言葉や料理、工芸の分野などで「ランナー文化」と称されるタイ北部独自の文化・伝統が育まれてきた。

チェンマイ門広場の屋台

中心部の旧市街では、四方は城壁と堀、そして5つの大きな門で囲われており、その中で、南東側に位置するチェンマイ門と呼ばれる門がある。本研究の対象地として設定したのが、このチェンマイ門から西に20mほどの位置にある広場の屋台である。旧市街を囲う堀の上にあるこの広場は、西側には堀の水路が、南北は道路に挟まれる形となっている。南北に幅約20m、全長約100mの東西に細長く伸びた広場には、植栽や緑地が多く存在しており、東側の曲線で囲われた内部はすべて緑地となっている。

3. チェンマイの屋台の特徴

3.1 マーケットの屋台

チェンマイでは、旧市街、またその近くの新市街で、多くのマーケット、バザールが見られる。ここで言う「マーケット」、「バザール」とは、大通りに沿って多くの屋台が建ち並ぶイベントや祭りのようなものである。またそれは、日時や曜日によって限定的、一時的に行われるものである。メインは大通りの両端の歩道に沿って屋台が並んでいるのだが、大通りに接する通り沿いにもいくつかの屋台がありその場所一帯がマーケットとなっている。毎晩、決まった場所に決まった屋台が建てられ、営業をして、営業が終われば片付け、解体をし、綺麗にその場所を去る。そのようにして行われるマーケットのうちチェンマイにおいて代表的な3つを以下にまとめた。

3.1.1 サタデーマーケット

サタデーマーケットは、調査対象地であるチェンマイ門広場のすぐ近くの通りで開かれるマーケットである。その名の通り、毎週土曜日の夜に開かれ、広場の南西に向かって延びる全長約1.5kmのウア・ラーイ通り（Wua Lai Rd）を、一時的に歩行者天国にして開催される。チェンマイ門広場から伸びる通り沿いで開催されることもあり、マーケットが開催される土曜日になるとチェンマイ門広場の屋台も普段よりも賑わいを見せる。

3.1.2 サンデーマーケット

サンデーマーケットはチェンマイ旧市街の東に位置するターペー門から、西へと延びる全長約1.5kmの通りで開催される大規模なナイトマーケットである。旧市街の中でもさらに中心に位置する通りで開催されるこのマー

ケットも、サタデーマーケット同様、一時的に道路を歩行者天国にして両端に屋台が並ぶ形態となっている。

3.1.3 ナイトバザール

ナイトバザールは、チェンマイ旧市街の東側、縦に伸びるチャン・克蘭通り（Chang Klan Rd）で毎晩開催される全長約1kmのマーケットである。他の2つのマーケットと大きく異なる点として、毎晩開催している点があげられる。またここでは、屋台が白線によって区切られており、他のマーケットよりも明確に場所の区分がなされている。

3.2 日常的な屋台

マーケットとは対照的に、人々の日常の中で営まれる屋台が市内には多く点在している。それは、毎日営業している屋台が殆どで、多くが飲食の屋台である。チェンマイではこうした屋台で、日常的な食事を摂る人も多い。上記のマーケットも現地の人々が利用している様子も確認できたが、多くは観光客であった。一方、市内に点在する屋台は現地の人々が利用している印象が強く、そういった意味でマーケットとは対照的に「日常的な屋台」と表現した。

また、毎日営業している屋台では、何かに「寄生して」建てられていること多い印象を受けた。具体的には、コンビニやスーパーといった人が集まる施設の前に店を構えたり、寺院の中に入っていたり、学校の門の前の通りに並んで学生が下校するタイミングで店を開いたりというものだ。どれも人や場所に寄生して、宿主の利益を一方的に享受している印象であった。しかし、宿主と位置付けたコンビニやスーパーといった商業施設や学校、寺院のどれも屋台を煙たがるわけではなく、寧ろ互いの存在が互いの利益、利用者を増やす相乗効果に繋がっていた。そういった意味では「共生していた」とも言える。

また屋台の多くは、「集まる」性質も持っていた。屋台の多くが1つだけではなく、いくつかのまとまりで集まって並ぶことが多くみられた。

3.3 チェンマイ門広場の屋台



図1 チェンマイ門広場

本研究で対象とするチェンマイ門広場の屋台では、上記のどちらにも分類できない要素がある。マーケットのように、時間による限定的な入れ替わり、設営・解体が行われる点と日常的な屋台として現地の人々が利用し、また毎日営業している点である。まず、前者に関して、朝と夜とで違う屋台が並んでいる。

4. 実測調査結果

今回の現地調査によって、得られた情報として、この広場での屋台は朝と夜で2つの側面が存在することが分かった。具体的には、朝（6時から11時頃）が主に洋服を扱った屋台が約20台、夜（15時から24時頃）が飲食を扱う屋台が約20台と朝と夜で、広場の屋台の入れ替わりが起こっていた。また、間の時間（12時から14時頃）の広場の様子は閑散としており、賑やかな朝夜の光景と大きく異なる様子も非常に特徴的であった。また、時間帯としての一日の変化だけでなく、1週間を通して様々な変化が見られた。朝夜ともに、基本的にほぼすべての屋台が年中無休であることが後述するインタビュー調査より明らかになっているのだが、1週間の中で、土曜日と日曜日に屋台数の増減を確認することができた。毎日のようにどこかで開催されるマーケットに伴い、屋台が移動することで街の賑わいが構築されている。こうした動きや移動による賑わいの演出は屋台のもつ仮設的な側面によるものであり、同時に屋台の魅力的な面であるといえる。

朝・夜それぞれに関して、チェンマイ門広場の屋台の図面を作成した。結果を以下に示す。

4.1 朝の様子

調査結果（2019年8月15日 7:00～）の朝に関しては、図2のようになった。屋台は合計で19台あり、衣服を扱う店が9台、飲食店が5台、その他が5台という内訳になった。その他に関しては、アクセサリや托鉢僧への供え物をセットで売っている店などがあった。時間帯が観光客の少ない朝方であるため、現地の人々による日常的な利用が見られた。また、このことは、扱う商品や展示の仕方からもわかる。朝は衣服を扱う店が多く並ぶと述べたが、それはいわゆる観光客が購入する土産品のようなものではなく、日常的に着るようなデザインの服が多く、また、外国人向けの英語表記の看板も飲食店のみであった。

朝の広場の使われ方において、夜と大きく異なる点として見られたのが駐輪スペースである。中心部に多くのバイクが駐輪していることが図面からも見て取れると思うが、これは夜では見られない光景であった。場所として広場の中心部を大きく活用しているのはもちろん、その数も夜と比べて大きく増加している。この大きく増えた要因として広場に面した北の大通りを挟んで向かい側にある市場があげられる。朝の賑わいの多くは道路を渡

った先にある市場によるものであることが調査により明らかになった市場では野菜や肉、魚といった生鮮食品、調味料、日用品まで様々な物が売られており、付近の多くの人々が毎朝この市場を利用しに来ていた。

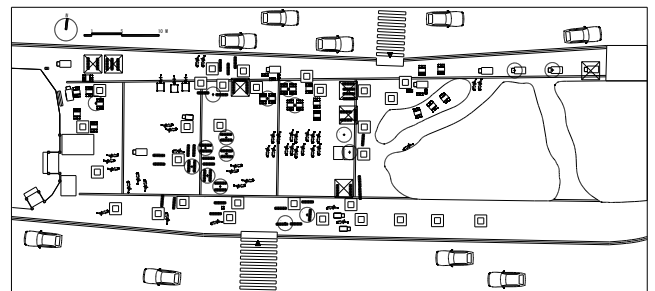


図2 チェンマイ門広場 朝の様子

4.2 夜の様子

調査結果（2019年8月13日 19:00～）の夜に関しては、図3のようになった。屋台は全部で18台あり、タイ料理、フルーツジュース、揚げ物、マンゴーライスなどすべて飲食店であった。夜の飲食店舗はすべてに英語表記が存在しており、接客も簡易的な英語を用いていた。また、図面の表記からもわかるように、朝と夜とでは屋台本体の種類が異なっていた。それは朝の屋台の中でも、衣服を扱う屋台と夜の飲食の屋台との違いであり、前者は四角いテント型、後者は移動式の屋台が主であった。それは屋台本体が持つべき機能としての差によるものと考えられる。前者での屋台の形態は、衣服の販売ということで、雨をしのげる屋根としての機能を最低限含んでいればよいが、後者は飲食を扱う屋台ということで調理や食材の置き場としての機能も含む必要がある。内包しきれない機能は椅子や台、植栽を囲うコンクリートブロックを使うなどして、各々が拡張し、工夫を凝らしていたが、多くの機能は屋台内部に集約されていた。この目的や用途の違いが屋台の形を決定づけていたものと考えられる。また、機能の集約されている例として、雨天時に屋根の骨組みとなる棒を内部に収納している屋台もみられた。このように機能の拡張性や目的、用途に応じた変化も仮設的な屋台の特徴の1つであるといえる。

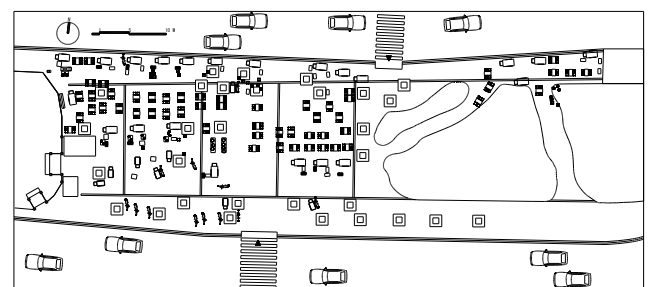


図3 チェンマイ門広場 夜の様子

※凡例

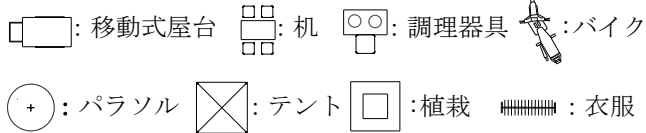


図3 テント型屋台(左)と移動式屋台(右)

4.3 インタビュー調査結果

インタビュー調査により、ほとんどの店が毎日営業していることが分かった。また、上記以外に、屋台設営解体に関して、専門の業者の存在が明らかになり直接インタビューを行った。それによると、ここで使用される机椅子等を貸し出し、運搬、配置をする人、広場で使用する大きな傘を貸し出し配置する人、入れ替わりの時間帯、屋台の営業していない時間帯に広場の清掃を行う人がいた。また朝の場所代に関しては、毎朝9時ごろに集金してまわり、夜の場所代に関しては毎月20日に広場の清掃を行い、その際にまとめて約1か月分集めていることが分かった。

表1 インタビュー調査結果

		朝					夜				
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	
屋台主（個人） に関して	名前	—	—	—	—	—	S氏	S氏	K氏	D氏	
	年齢	60歳	40歳	40歳	30歳	50歳	61歳	20歳	50歳	50歳	
	性別	女性	女性	男性	男性	男性	男性	女性	女性	男性	
	屋台種類	コーヒー	女性ファッション	タイ料理	男性ファッション	男性ファッション	コーヒー	スムージー	女性ファッション	男性ファッション	
	営業年数	42年	10年	20年	—	20年	25年	10年	21年	25年	
	営業時間	am.6~pm.11	am.4~pm.11	am.3~pm.10	am.7~pm.11	日による	pm.4~pm.11	pm.4~pm.11	pm.5~pm.11	pm.3~pm.12	
屋台営業に関して	定休日	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
	営業許可	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	
	場所代	70円/日	35円/日	70円/日	70円/日	70円/日	720円/20日	720円/20日	720円/20日	720円/20日	
	自身の店舗領域	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

5. 人々のふるまいから見る調査結果

5.1 朝の様子

朝では、実際の利用者と広場に訪れる人の数の差異があげられる。実際に衣服の屋台で買い物をする人よりも多くの人が広場に訪れていたのである。朝の屋台では、広場を駐輪スペースとしてのみ利用する人も一定数存在し、その目的は広場の北側に面する道路を挟んだ向かいにある市場であった。これは屋台の「寄生する」という性質ともいえる。早朝、多くの人が買いにくる市場という宿主に寄生する形で屋台が並んでいた。また、寄生するという観点で考えると、広場の中心部を広く占有するのが、屋台ではなくバイクであった点も、この広場における屋台が寄生する形であると考察できる。

朝の屋台の特徴として、衣服の屋台が殆どであった点に関し、人々のふるまいや工夫として挙げられるのが植栽の利用である。調査期間が8月の雨季であるために調査中もしばしば雨が降ることがあったのだが、そこで屋台主たちは大きなパラソルやテントと近くの木に紐を括り付けてシートを被せて、屋根部分を拡張していた。また直接木を屋根の代わりにするといった行為もみられた。

5.2 夜の様子

夜の広場の屋台の様子は、観光客が多く、現地の人々の多い朝とは、異なったふるまいが見られた。屋台主によるふるまいとして、区画の整理がフォーマルに行われる一方で、白線で細かく区切られていたマーケットほど正確ではないグレーゾーンな境目では、人々は個人の利潤や使いやすさを優先して拡張を行うことが分かった。しかし、それは隣接する屋台の領域を侵すほどの拡張ではなく、互いにある程度の領域を保持しつつ、拡張を行っていた。具体的には、自身の周りにある四角いコンクリートブロックを利用するが、利用している部分は四角いブロックの隣接する1辺のみで、反対側はブロックを挟んだ隣の屋台が利用するといった点である。

5.3 インタビュー調査結果からみるふるまい

インタビュー調査(表1)より、自身の領域に関して、屋台主自身も不明確であることが判明したが、このことから、屋台の拡張が自身の使いやすさによって進められ、お互いが意識しない中で暗に領域侵犯を避けていることが考えられる。自身の領域が不明確な認識の中で、各々が個人の価値観によって拡張しているのである。

6. まとめ

領域侵犯をしない範囲内での拡張が行われる一方で、共有される範囲もあることもわかった。内包しきれない屋台の調理という機能の拡張が行われる中で、机やイスといった機能は共有され使われていた。これに関しては、屋台ごとに異なるテーブルクロスや調味料によって、表面上軽い領域わけがなされているが、共有し使うこともある。例えば、屋台Aで頼んだが、屋台Bのテーブルクロスがかかっている机で食べるといった様子も見受けられた。どちらも機能の拡張としてとらえられるが、同時に屋台の「集まる」という性質の1つであるといえる。屋台という仮設的なものであるからこそ、複数で機能を補完しあっていると考えられる。

参考文献

- 1) 東南アジア4都市における屋台の様態と共生する秩序の関係 (早稲田大学 中村 航、古谷 誠章)
- 2) 東南アジア4都市における屋台の様態と共生する秩序の関係 (早稲田大学 中村 航、古谷 誠章)
- 3) タイ・バンコクにおける街路空間利用形態に関する研究 (日本大学 坪井 善道ら5名)